

日系ブラジル人「移住地生活展開論」の再検討

——石川県小松市調査をもとに——

北陸学院大学 俵希實

1 目的

1990年代以降、外国人居住者の集住地を対象とした事例研究が多く行われてきた。これらの研究は、外国人居住者が日本の居住地域でどのような生活を展開しているのかを論じたもので、報告者はこれらの研究をまとめて「移住地生活展開論」と呼んでいる。その中で、日系ブラジル人（以下「日系人」と記す）を対象とした研究によって示された論点を整理したところ、①日系人のコミュニティやネットワーク形成、②日系人と日本人住民との関係、③日系人の定住化という3つの論点が抽出された。そこで、これら3つの論点に則った調査を石川県小松市で行った結果、日系人たちの生活展開に影響を与えている要因として、従来のコミュニティ論の要因に加え、「移住プロセス」「居住地（集住地／非集住地）」「地域の労働市場」を新たに提示することができた（俵 2006）。

本報告では、1997年から2005年までの調査結果に近年の調査結果を加え、1997年から今日までの小松市における日系人の生活展開の変容を捉えた上で、「移住地生活展開論」の3つの論点およびその規定要因について再検討を試みる。

2 方法

小松市において聞き取り調査を実施する。日系人に係る機関（労働機関、教育機関、行政機関など）の関係者、日本人住民、そして日系人から、日系人たちを取り巻く環境や、日系人および日本人住民の意識や行動がどのように変化してきたのかについて聞き取りを行い、その結果を1997年2005年までの調査結果に加え、それらに基づき、先の「目的」で述べた事項について改めて検討する。

3 結果

近年の聞き取り調査から明らかになった事項の一部を「移住地生活展開論」の3つの論点に即して述べる。①エスニック・コミュニティやエスニック・ネットワーク形成：長期滞在者の持っている情報がSNSなどを通じて日系人たちに伝達されている。近年はリーダーとなる人が見当たらず、以前よりもまとまりがなくなっている。②日系人住民と日本人住民との関係：両者のつきあいはほとんどみられない。しかし、日系人たちは職場での行事に参加するようになってきた。③定住化：リーマンショック後、子どもがいる家族、日本語能力の高い人が小松に残った。ある派遣会社では10年以上働いている人も多い。日系人たちの生活展開は少しずつ変容していることが確認された。

4 結論

近年の調査結果より、個人においては滞在の長期化、家族の形成といったことが、社会においてはSNSの普及などが新たに考慮すべき事項であることが明らかとなった。これらから、現在の日系人の生活展開を描出するにあたり、提示した「移住地生活展開論」の論点とその規定要因について更新する必要があることが示唆された。

文献

俵希實, 2006, 「日系ブラジル人の居住地域と生活展開——石川県小松市と集住地との比較から」『ソシオロジ』51(1): 69-85.